

## 幼児の描画表現に関する発達的研究 — 想像画と観察画の比較 —

近藤 綾<sup>1</sup>・渡辺 大介<sup>2</sup>・中見 仁美<sup>3</sup>

### A developmental study of drawing expression in young children

Aya KONDO<sup>1</sup>, Daisuke WATANABE<sup>2</sup>, Hitomi NAKAMI<sup>3</sup>

**Abstract:** The present study examined the development of drawing expression in young children, especially the transition between intellectual realism and visual realism, by comparing what they drew with imagination and what they drew while looking at a model. Forty-five children (three age groups: 3-4, 4-5, and 5-6 year olds;  $n = 15, 16, 14$ , respectively) participated in this study. First, they were instructed to draw a lion without looking at anything (the imagination task). Next, they drew a lion while looking at a photo of a lion (the imitation task). We checked on each drawing for the presence of lion's component parts (eyes, mouth, nose, ears, mane, head, body, four legs, tail, and color). In addition, each drawing was evaluated whether it seemed to lion. The results revealed the following: 1) Young children were able to draw more lion's parts on the imitation task than the imagination task. 2) Four-five year-olds and 5-6 year-olds were able to draw more parts than 3-4 year-olds. 3) The transition from intellectual realism to visual realism occurred approximately between five and six years of age. 4) It was shown by evaluation that older children's drawing had captured the more distinctive features of lion than younger children's one.

**Key words:** young children, drawing development, intellectual realism, imagination, imitation

#### はじめに

子どもはどのように絵を描くのだろうか。幼児期の子どもは大人とは異なる独特な描画を行うと言われている。Tomas & Silk (1990), 東山・東山 (1999) そして田口 (2001) を参考に子どもの描画発達をまとめると次のようになる。1歳半から2歳半にかけてはなぐり書き期とよばれ、1歳半頃から、紙の上にするし(スクリブル)を付け始める。初期のスクリブルは規則的でリズムカルな動きを楽しむ表現であり、次第に意味づけが行われる。2歳半から5歳までは象徴期とよばれ、2歳半頃からは円やうずまき

などの形が多く現れ、それを何かの再現として意味づけることが可能になる。円、三角形、四角形や十字などの形が描けるようになり、これらの図形を用いて人や物などさまざまなものが再現されていく。例えば、円は顔や目、口、鼻などを表すために用いられ、図形を組み合わせで頭足人のような人物画を描くようになる。

5歳から8歳までは図式期とよばれ、人形や太陽、花、木、家などが図式的に描かれる。動作や表情が描かれるようになり形も複雑になっていく。この時期の描画は、大きさの釣り合いが取れていなかったり、隠れて見えていない部分も透けて見えるように描いたり、展開図のように描いたり、いくつもの視点から対象の見えを描いたりする。そして8歳以降は写実期とよばれ、より視覚的に写実的な描画表現を行うよ

1 園田学園女子大学人間教育学部

2 大阪国際大学短期大学部

3 園田学園女子大学短期大学部

うになる。

Luquet (1927) によれば、幼児は目の前の対象の見えより、自分のもつ対象の内的モデルに基づいて描画しており、描画対象について知っている要素を絵の中に描こうとするようだ。これは、知的リアリズム (intellectual realism) と呼ばれており、7・8歳以降に見られる見えどおりに描く視覚的リアリズム (visual realism) と区別される。つまり、幼児にとってのリアリズムは、心の中の内的モデルを忠実に描くことであり、発達に伴って対象を見えどおりに描く視覚的リアリズムへと移行していくのである (田口, 2001)。そして、この知的リアリズムは、見えない部分までも描いてしまうという幼児期特有の描画表現全般を表す記述概念として用いられている (加藤・浜谷・平沼・田中・子安・古池, 2001)。

知的リアリズムの概念を実証的に示した Freeman & Janikoun (1972) は、取っ手の反対側に花の模様が描かれたコップを用意し、取っ手が見えず花模様が見えるように提示して、5歳から9歳児に描画するよう教示した。その結果、5歳から7歳児の多くは見えないはずの取っ手を描き、8歳以降になってようやく見えておりに描く反応が増加した。彼らの研究を受けて、幼児期から児童期にかけての描画発達の研究は盛んに行われ、8歳以下でも描画対象の提示方法 (田中, 1978)、文脈 (Bremner & Moore, 1984) や教示方法 (Davis, 1983) によって対象を見えどおりに描画できることが示されている。

従来の研究から、対象の提示方法や教示方法といった外的条件の操作により、幼児も見えどおりに描くことが可能であることは示唆されている。しかし、知的リアリズムから視覚的リアリズムへと移行する間に幼児の描画表現がどのように変化するのかについてはほとんど焦点が当てられていない。ある時期を境に、幼児の描画表現が知的リアリズムから視覚的リアリズムに一変するとは考えにくく、知的リアリズムと視覚的リアリズムが混合した過渡期のようなものが存在するのではないかと推察される。このことは、田口 (2001) においても、視覚的リアリズムに至るまでの知的リアリズムの発達の变化を細かく検討することの必要性が指摘されており、この分野の課題といえるだろう。

そこで本研究では、幼児の観察画、すなわちお手本を見ながら描いた絵に着目して幼児の描

画表現が知的リアリズムから視覚的リアリズムへと移行する道筋を発達的に検討することを目的とする。従来のリアリズムに関する研究では、描画対象としてコップが用いられており、取っ手が見えないように提示することで知的リアリズムや視覚的リアリズムの特徴を明らかにしている。つまり、本研究における観察画は、これら2つのリアリズムが含まれた条件といえる。そして、本研究では観察画の比較対象として想像画、すなわち何も見ないで描いた絵の条件を設定する。これは、幼児がすでに獲得している内的モデルを明らかにするためである。つまり、幼児に想像画を描かせることで、幼児が描画対象に対してすでに有している内的モデルの構築の程度を明らかにし、それと観察画を比較することで、知的リアリズムから視覚的リアリズムへの移行過程を探ることを試みる。

なお、描画の形式については、一般に、“夏休みの思い出”のようなテーマをもとに自身のイメージに基づいて絵を描く場合と、カブトムシの観察記録や風景画、人物画を描く等のように対象を見ながら模写する場合がある。そのため、保育活動において「○○を描きましょう」ということは特別なことではなく課題自体の困難さは生じないと考えられる。

上述した描画形式の比較を行うにあたり、本研究では秦野 (2000) の方法論を参考にする。秦野は、3歳から5歳児を対象に、指定した動物を描くという課題における幼児の描画発達を明らかにしている。具体的には、Goodenough (1926) が開発した人物画知能検査を参考に、描く対象の特定化を行いその年齢変化を捉えるという視点に立って次の3点について調べている。1) 指定された動物をそれぞれの特徴を捉えた絵として描けるようになるのはいつごろか、2) 動物によって描ける時期が異なるのか、3) 幼児期の子どもの好む描き方や年齢による描画表現の特徴、である。

秦野 (2000) は、特徴のある5種類の動物 (ゾウ、キリン、ブタ、ウシ、ライオン) を画用紙に描かせ、各描画の必要部位が描かれているかを得点化した。その結果、全ての動物において5歳児は他の年齢よりも動物の基本的特徴と各動物のもつ独自の特性を上手に図式化していた。また、4歳児は3歳児よりも基本的特徴や各動物が持つ独自の特性を理解して図式化していた。そして、3歳児は各動物が持つ特性の理解が十分ではなく、図式化も困難であったとし

ている。結果から秦野は、各年齢差は動物に共通する特徴と各動物の理解、さらにうまく図式化できるかの能力の有無が関与していると考察している。

また、秦野（2000）は対象のイメージを的確に表現しているかどうかという側面から、女子大学生に描画の印象評定を行った。その結果、5歳児の描画は他の年齢よりも項目達成数が多く、明らかに多くの部位を描き、対象のイメージを表現していた。4歳児と3歳児については、印象評定では年齢間に相違がみられたが、項目達成数からみると顕著な違いはなかった。このことから、描画的に対象のイメージを表現しているかどうかの判断には、各属性が全て描かれているか、あるいはどのくらい正確に描かれているかだけではなく、全体印象判断も大きいことが示唆された。

想像画と観察画といった描画形式を比較する本研究では、秦野（2000）と同様に対象の特定化から年齢変化を捉えていくことが有効だと考えられる。なぜなら、幼児が描く特定の項目について、年齢間、条件間で比較することができるからである。従って本研究では、知的リアリズム期の子どもの想像画と観察画に焦点を当て、描画形式の違いによる幼児の描画の特徴を発達的に明らかにする。具体的には、秦野の方法論を参考に、対象の特定化と印象評定を行い、描画形式や年齢変化を捉える。なお、描画対象には、子どもの認知度が高く特徴を捉えやすいライオンを用いることとする。

## 方 法

### <描画>

**参加児** 年少児15名（平均年齢4歳0か月、男児6名、女児9名）、年中児16名（平均年齢4歳8か月、男児2名、女児14名）、年長児14名（平均年齢5歳8か月、男児6名、女児8名）の計45名であった。その内、年中児男児1名と女児1名は観察画を描くことを途中でやめてしまったため分析対象から除外した。

**材料** 各自16色のクレヨンセットを用いて絵を描いた。ライオンの想像画と観察画にはA4の白画用紙2枚を用いた。観察画を描く際のお手本にはライオンの写真を用いた。ライオンの写真は、あらかじめ加工して尾を消したものを使用した。この操作は、幼児の描画から知的リアリズムや視覚的リアリズムの特徴を明らかにするためである。つまり、想像画では尾を描く

が観察画では尾を描かない場合が視覚的リアリズム期にあたり、想像画でも観察画でも尾を描く場合が知的リアリズム期にあたるといえる。なお、写真は1人1枚配布するため予備を含めて20枚準備した。

**手続き** 調査は年齢ごとに集団実施した。午前10時から1時間程度をお絵描きの時間として設定し、実施にあたっては実験者に加え、クラス担任が補助員として参加した。実験者は、順次配布された2枚の画用紙にライオンの絵を描くよう参加児に教示した。なお、教示文はあらかじめ用意したものを読み上げた。参加児には、はじめにライオンの絵を何も見ないで描かせ、その後、実験者がライオンの写真を配布してよく観察して描くよう教示した。なお、想像画と観察画のカウンターバランスをとらなかったのは、ライオンの写真を見せてしまうと想像画が写真の影響を受けると推測されたからである。画用紙は絵を描く際に1枚ずつ配布し、参加者全員が描き終わった時点で回収し、次の課題に移るという手順をとった。

### <印象評定>

**参加者** 女子大学生72名（平均年齢20歳11か月）であった。

**材料および手続き** 幼児の描画（87枚）を全て写真撮影し、スライドを作成した。年齢や描画形式についてはランダムに並べ替え、通し番号をつけて3秒間隔で提示されるよう設定した。参加者には通し番号の横に4段階評定ができるような質問紙を作成して配布した。評定はライオンに見える（4点）、やや見える（3点）、あまり見えない（2点）、見えない（1点）とした。調査は集団で実施した。PowerPointを利用してスクリーン上にスライドを提示した後、質問紙を配布し、次の教示を行った。「これから3秒に1枚のスピードで幼児が描いたライオンの絵を見てもらいます。ライオンらしく見えるかどうかを評定してください。ライオンらしく見えるなら“4”、やや見えるなら“3”、あまり見えないなら“2”、見えないなら“1”のどれかひとつを選んで質問紙に丸を付けて下さい」。参加者は87枚すべての絵について評定した。実験にかかった時間は15分程度であった。

## 結果と考察

### <描画>

Goodenough（1926）の得点化に準じて描画の各部位に得点（1点）を与え、得点の高い方

がより多くの部位が描かれている絵になるよう配点した。評定項目は、目（2つ）、口、鼻、耳、たてがみ、頭部、胴部、4本足、尾、色の10項目であった。なお、色については、茶色やオレンジといった茶系統を中心とした色合いで描いている場合を正解とした。10項目について、実験者2名がそれぞれ独自に各描画の評定を行った。評定者間の一致率は94%であり、一致しなかったものについては、評定者同士で再度確認し、協議の上で得点を決定した。

Table1は、各年齢の描画形式ごとの描画得点を示している。3（年齢：年少児・年中児・年長児）×2（描画形式：想像画・観察画）の2要因分散分析を行った。年齢は参加者間要因、描画形式は参加者内要因であった。尾については、観察画においてあえて尾を消す操作を行ったことから他の項目と同様に配点することができないため、分散分析は尾の項目を除外した9項目（各1点9点満点）について行った。その結果、年齢の主効果（ $F(2,40)=45.97, p<.001$ ）および描画形式の主効果（ $F(1,40)=13.77, p<.001$ ）が有意であったため下位検定を行った。なお、主効果の下位検定について以下の分析では常にライオン法（ $p<.05$ ）を用いた。下位検定の結果、年齢については、年少児よりも年中児と年長児の描画得点が有意に高かった。年中児と年長児間に差はみられなかった。描画形式については、想像画よりも観察画の描画得点が有意に高かった。なお、年齢と描画形式の交互作用（ $F(2,40)=2.56, p<.10$ ）は有意傾向であった。

Table 1 各年齢の描画形式ごとの描画得点の平均 (SD)

| 描画形式 | 年少児            | 年中児            | 年長児            |
|------|----------------|----------------|----------------|
|      | n=15           | n=14           | n=14           |
| 想像画  | 2.33<br>(2.18) | 5.43<br>(1.05) | 6.29<br>(0.96) |
| 観察画  | 2.60<br>(2.27) | 7.29<br>(1.10) | 7.36<br>(1.17) |

描画得点の結果からは、年少児よりも年中児と年長児のほうがより多くの項目が描けていること、想像画よりも観察画のほうがより多くの項目が描けていることが示された。秦野(2000)のライオンの結果では、年少児と年中児よりも年長児のほうがより多くの項目が描けることが明らかになっている。よって、本研究の結果は秦野(2000)の結果と概ね一致しており、幼児期の描画の発達が示唆されたといえる。また、

想像画よりも観察画のほうが多くの項目が描けていることから、幼児は、想像して描くよりもお手本をもとに描くほうがよりライオンの部位を正確に描けることが明らかになった。

尾を描いたか否かについて年齢別に確認したところ、年少児では1名が尾を観察画に描いていた。年中児では1名が想像画に描いていた。そして、年長児では10名が描いていた。年長児の内訳は、想像画のみに描いた幼児が3名、観察画のみに描いた幼児が3名、想像画と観察画の両方に描いた幼児が4名であった。先述したように、想像画を描く際にお手本にしたライオンの写真は尾を消している。そのため、想像画では尾を描き観察画では描かない場合が視覚的リアリズム期にあたり、想像画と観察画の両方で尾を描いた場合が知的リアリズム期にあたることになる。結果から、年中児では尾を描いた幼児が1人であったのに対し、年長児では半数以上が尾を描いていた。年長児の想像画と観察画の両方に尾を描いた4名は知的リアリズム期にあたり、想像画のみに尾を描いた3名は視覚的リアリズム期に到達しているといえる。つまり、年長児では知的リアリズム期と視覚的リアリズム期が混在しており、5-6歳という年齢段階を知的リアリズムから視覚的リアリズムへの移行期に位置づけることができるだろう。

また、年少児や年中児は知的リアリズム期にあたるが、年少児は尾を描くか否か以前に、たとえライオンに対する内的モデルがあったとしてもそれをうまく図式化すること自体が困難なために本研究では知的リアリズムの特徴を確認できなかったといえる。また、年中児はライオンの特徴をある程度描くことができるようになっており、観察画でも想像画と同じようにカラフルなライオンを描いたり、周辺やライオン自体を装飾したりする幼児が多かったことから、まさに知的リアリズム期の描画の特徴を確認できたと言っていいだろう。そして、年長児の描画表現は、年中児の知的リアリズム期の描画表現とは質的に異なっていることが確認された。つまり、年長児では年中児のように想像画自体に装飾等を行うことが少なく、より現実のライオンに近い絵が描かれていたのである。これは、年中児と年長児の内的モデルが異なる可能性を示しており、年長児は現存するライオンに近い内的モデルを有しており、それを描画で表現できていたと考えられる。このように、幼児の描画は細かな段階をいくつも経ながら知的



リアリズムから視覚的リアリズムへと移行していくのではないだろうか。そして本研究は、知的リアリズム期の中にも細かな段階があることの一端を示せたと考えられる。

次に、幼児が実際にどのような絵を描いたのかについて分かりやすい典型例を Figure 1-1 から Figure 3-2 に示す（付録参照）。Figure 1 は年少児の想像画（1-1a,b）と観察画（1-2a,b）、Figure 2 は年中児の想像画（2-1a,b）と観察画（2-2a,b）、Figure 3 は年長児の想像画（3-1a,b）と観察画（3-2a,b）である。なお、想像画と観察画は同一人物が描いたものである。年少児の4歳2か月の女兒の描画得点は想像画0点、観察画6点であり、目、口、鼻、たてがみ、頭部、色が描かれていた。年少児の4歳4か月の女兒の描画得点は想像画2点で頭部、色が描かれており、観察画は6点で目、口、鼻、たてがみ、頭部、色が描かれていた。年中児の4歳8か月の男児の描画得点は、想像画6点で目、口、たてがみ、胴部、頭部、色が描かれており、観察画は7点で目、口、鼻、たてがみ、胴部、頭部、色が描かれていた。年中児の5歳2か月の女兒の描画得点は、想像画5点で目、口、鼻、たてがみ、頭部が描かれており、観察画は9点で、目、口、鼻、耳、たてがみ、胴部、頭部、4本足、色が描かれていた。年長児の5歳6か月の女兒の描画得点は、想像画が6点で、目、口、鼻、たてがみ、頭部、色が描かれており、観察画は9点で目、口、鼻、たてがみ、頭部、胴部、4本足、尾、色が描かれていた。年長児の6歳1か月の女兒の描画得点は、想像画が10点で目、口、鼻、耳、たてがみ、胴部、頭部、4本足、尾、色が描かれており、観察画は9点で目、口、鼻、耳、たてがみ、胴部、頭部、4本足、色が描かれていた。

Figure から明らかなように、年齢が上がるにつれてライオンの特徴が多く捉えられており得点も高くなっている。Figure 1-1 では年少児特

有の線や円を描いていることが分かり、Figure 1-2 ではそれに加えてたてがみや鋭い目を表現できていることが確認できる。つまり、年少児における想像画と観察画の顕著な違いが示されているといえる。また、年中児の描画ではライオンの特徴は捉えられているが、Figure 2-1b のようにライオンに加えて周りにハート、他にお花やリボンなどを描くといった特徴が多数の幼児にみられた。さらに、ライオンの色も本来のものとはかけ離れたカラフルな色が取り入れられているという想像画独特の表現が多数確認された。Figure 3-1b と3-2b は知的リアリズム期の年長児の描画である。年長児にもなると想像画でも観察画でもライオンの特徴をととも上手く描写できるようになっている。このように描けるようになることで、描画対象の細部まで情報を観察することが可能になり、そのことが次の段階への移行につながっていくのかもしれない。

Table 2 は、年齢別の項目達成人数を示している。評定項目に従って、年齢ごとに各部位を描いた子どもの人数を算出し、年齢ごとに各部位を描いた平均人数を求めた。そして、各項目の人数の偏りを年齢間で比較するために想像画、観察画別に $\chi^2$ 検定を行った。その結果、想像画では、目、口、たてがみ、頭部、胴部、色において年齢による偏りがみられ、目、口、たてがみ、頭部において年少児は各項目を描かなかった幼児が多く、年中児と年長児は描いた幼児が多かった。胴部では、年少児は描かなかった幼児が多く、年長児は描いた幼児が多かった。また、色では、年少児と年中児で茶系統以外の色（水色等）を用いた幼児が多く、年長児は茶系統を中心とした色を用いた幼児が多かった。観察画では、目、口、たてがみ、頭部において年少児は描かなかった幼児が多く、年中児と年長児は描いた幼児が多かった。鼻は、年少児では描かなかった幼児が多く、年中児は描いた幼児

Table 2 年齢ごとの項目達成人数 (%)

|        |            | 目            | 口            | 鼻           | 耳          | たてがみ         | 頭部           | 胴部         | 4本足        | 色            |
|--------|------------|--------------|--------------|-------------|------------|--------------|--------------|------------|------------|--------------|
| 想像画    | 年少児 (n=15) | 8 (53.3)     | 5 (33.3)     | 4 (26.7)    | 0 (0.0)    | 7 (46.7)     | 7 (46.7)     | 1 (6.7)    | 0 (0.0)    | 3 (20.0)     |
|        | 年中児 (n=14) | 14 (100.0)   | 14 (100.0)   | 8 (57.1)    | 1 (7.1)    | 14 (100.0)   | 14 (100.0)   | 5 (35.7)   | 3 (21.4)   | 3 (21.4)     |
|        | 年長児 (n=14) | 14 (100.0)   | 14 (100.0)   | 5 (35.7)    | 2 (14.3)   | 14 (100.0)   | 14 (100.0)   | 8 (57.1)   | 3 (21.4)   | 14 (100.0)   |
| 観察画    | 年少児 (n=15) | 8 (53.3)     | 7 (46.7)     | 5 (33.3)    | 0 (0.0)    | 5 (33.3)     | 7 (46.7)     | 2 (13.3)   | 0 (0.0)    | 5 (33.3)     |
|        | 年中児 (n=14) | 14 (100.0)   | 14 (100.0)   | 12 (85.7)   | 4 (28.6)   | 14 (100.0)   | 14 (100.0)   | 9 (64.3)   | 9 (64.3)   | 12 (85.7)    |
|        | 年長児 (n=14) | 14 (100.0)   | 14 (100.0)   | 10 (71.4)   | 2 (14.3)   | 14 (100.0)   | 14 (100.0)   | 11 (78.6)  | 10 (71.4)  | 14 (100.0)   |
| 平均達成人数 | 年少児 (n=15) | 8.0 (53.3)   | 6.0 (40.0)   | 4.5 (30.0)  | 0.0 (0.0)  | 6.0 (40.0)   | 7.0 (46.7)   | 1.5 (10.0) | 0.0 (0.0)  | 4.0 (26.7)   |
|        | 年中児 (n=14) | 14.0 (100.0) | 14.0 (100.0) | 10.0 (71.4) | 2.5 (17.9) | 14.0 (100.0) | 14.0 (100.0) | 7.0 (50.0) | 6.0 (42.9) | 7.5 (53.6)   |
|        | 年長児 (n=14) | 14.0 (100.0) | 14.0 (100.0) | 7.5 (53.6)  | 2.0 (14.3) | 14.0 (100.0) | 14.0 (100.0) | 9.5 (67.9) | 6.5 (46.4) | 14.0 (100.0) |

が多かった。また、胴部、4本足と色では、年少児は描かなかつた幼児が多く、年長児は描いた幼児が多かった。従つて、結果からは年齢とともに描く項目が多くなること、年少児はライオンの特徴や特定部位を描くことが難しく、年中児でも色については茶系統を中心とした色を用いない幼児が多いことなどが明らかになった。また、想像画と観察画で抽出部位の年齢差に大きな違いがないことも明らかになった。

加えて、Table 2の項目別の項目達成人数を見ていくことにより各年齢の描画特徴をまとめると、全体を通してどの年齢でも簡単に描くことができた項目は目、口、たてがみ、頭部であった。また、全体を通してどの年齢も描くのが難しかった項目は耳、胴部、4本足であった。耳を描くのが難しい理由は、たてがみを描くことで耳を描きにくかったことが考えられる。胴部は、顔を大きく描きすぎて描くスペースがなくなつてしまつたり、一生懸命顔を描いたために胴部を描く前に集中力が切れてしまつていた。結果からは、年中児以降はライオンの特徴をよく捉えて描けており、年少児でもいくつかの特徴は捉えられていることが分かつた。また、描くのが難しかった項目では、想像画より観察画の達成人数が増えていることから、写真をもとに描くほうが、ヒントが得られて描きやすいことが考えられた。

#### <印象評定>

Table 3は、女子大学生による幼児の各描画の“ライオンらしさ”の評定得点の平均(SD)を示している。得点は、“見える”を4点、“やや見える”を3点、“あまり見えない”を2点、“見えない”を1点とし、高得点のほうがライオンのイメージをより表しているように配点した。3(年齢:年少児・年中児・年長児)×2(描画形式:想像画・観察画)の2要因分散分析を行った。年齢は参加者間要因、描画形式は参加者内要因であった。その結果、年齢の主効果( $F(2,40)=71.92, p<.01$ )が有意であったため下位検定を行った。下位検定の結果、年少児、年中児、年長児の順にライオンのイメージをより表していると評定された。なお、描画形式の主効果( $F(7,40)=3.80, p<.10$ )は有意傾向であり、想像画よりも観察画のほうがライオンのイメージをより表していると評定された傾向がうかがえた。

印象評定の結果からは、年齢が高くなるにつれてライオンの特性を表した描画表現がなされ

Table 3 女子大学生による幼児の各描画の“ライオンらしさ”の評定得点の平均(SD)

| 描画形式 | 年少児            | 年中児            | 年長児            |
|------|----------------|----------------|----------------|
|      | n=15           | n=14           | n=14           |
| 想像画  | 1.19<br>(0.24) | 2.40<br>(0.76) | 3.17<br>(0.50) |
| 観察画  | 1.30<br>(0.59) | 2.77<br>(0.69) | 3.31<br>(0.36) |

ていると判断されたことが分かつた。また、若干ではあるが想像画よりも観察画のほうがライオンのイメージをより表しているということも分かつた。これらの結果をTable 1の結果と対応させて解釈すると、年中児と年長児とでは描画得点自体には得点間に差がないにもかかわらず、女子大学生は年中児よりも年長児のほうがよりライオンのイメージを表していると判断した。これは、描画が的確に対象のイメージを表現しているかの判断には、ライオンの属性が描かれていることや、どのくらい正確に描かれているのかだけが手がかりになるわけではなく、秦野(2000)が述べるように全体印象判断も大きく影響しているためだと考えられる。つまり、年中児と年長児とでは、描いた項目自体に顕著な違いはないものの、各部位をライオンとして構成させる点で差があつたと考えることができるだろう。結果からは、このような全体を構成する能力も描画の発達には関わっていることが示されたといえる。また、観察画と想像画については、描画得点間には顕著な違いが見られたが、印象評定では有意傾向しかみられなかつた。この点から、幼児でもお手本をもとに描く場合のほうが想像して描く場合よりもより正確にライオンを描けるが、そのことが必ずしもライオンをより表しているという判断につながるわけではないことが示されたといえる。

#### まとめ

本研究では、知的リアリズム期の子どもの想像画と観察画に焦点を当て、描画形式の違いによる幼児の描画の特徴を発達的に明らかにすることを目的とした。

描画の結果からは、幼児は年齢とともにライオンの特徴であるたてがみや顔に関する特定部位に注目して絵を描けるようになるという発達が確認された。具体的には、年少児ではライオンのイメージというよりも線や円を描く姿や一般的な顔のイメージに従つて描くことが多く見

られた。年中児では、ライオン独自の特徴や全体像をしっかりと描くことができるようになることに加え、想像力に溢れたストーリー性のある描画表現が多く見られ、知的リアリズム期独特の世界観が確認された。そして、年長児ではライオンの特性をさらに正確に捉えて表現できるようになっており、知的リアリズムから視覚的リアリズムへの移行期にあたる年齢段階であることもうかがえた。また、印象評定では、第三者の評価は描画対象を構成する項目よりも図式化のスキル、つまり全体的な印象による影響が強く反映されることが示された。

本研究では年齢別や描画形式別に描画の特徴を捉えて発達過程を示し、探索的ではあるが知的リアリズムから視覚的リアリズムへの移行期にあたる年齢段階を示せた点において意義があったといえるだろう。しかし、各年齢の描画表現の特徴を大まかにしか捉えられていないという限界もあった。よって、今後は年齢別に課題を設定し、より詳細な描画表現を丁寧に捉えていくことが必要であると考えられる。

## 文 献

- Bremner, J. G., & Moore, S. (1984). Prior visual inspection and object naming: Two factors enhance hidden feature inclusion in young children's drawings. *British Journal of Developmental Psychology*, **2**, 371-376.
- Davis, A. M. (1983). Contextual sensitivity in young children's drawings. *Journal of Experimental Child Psychology*, **35**, 478-486.
- Freeman, N. H., & Janikoun, R. (1972). Intellectual realism in children's drawings of a familiar object with distinctive features. *Child Development*, **43**, 1116-1121.

Goodenough, F. L. (1926). *Measurement of intelligence by drawings*. New York: World Book Company.

秦野悦子 (2000). 幼児はどのように動物画を描くか 川村学園女子大学研究紀要, **11**, 87-100.

東山 明・東山直美 (1999). 子どもの絵は何を語るか：発達科学の視点から 日本放送出版協会

加藤義信・浜谷直人・平沼博将・田中義和・子安増生・古池若葉 (2001). 「知的リアリズム」再考：21世紀の新しい描画研究に向けて 日本教育心理学会総会発表論文集, **43**, S94-S95.

Luquet, G. H. (1927). *Le desir: nenfantin (reprint 1977)*. Paris : Delachaux & Niestle. (リュケ, G. H. 須賀哲夫(監訳) (1979). 子どもの絵：児童画研究の源流 金子書房)

田口雅徳 (2001). 幼児期の描画発達と空間認知の発達との関連 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部, 学習開発関連領域, **50**, 73-82.

田中義和 (1978). 幼児の描画における知的リアリズムに関する実験的検討 日本教育心理学会総会発表論文集, **20**, 342-343.

Thomas, G. V., & Silk, A. M. (1990). *An introduction to the psychology of children's drawing*. New York: Harvester Wheatsheaf. (トーマス, G. V., & シルク, A. M. 中川作一 (監訳) (2011). 子どもの描画心理学 法政大学出版会)

## 謝 辞

本研究にご協力下さった園長先生をはじめとする先生方、そして一生懸命ライオンを描いてくれた子どもたちに心からお礼を申し上げます。

## 付 録

### 幼児が描いた動物画の例

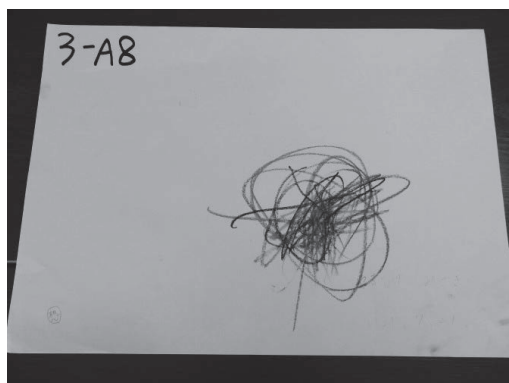


Figure 1-1a 年少児・想像画 (4歳2か月女児)

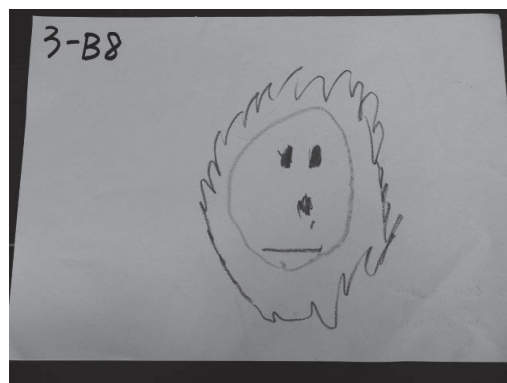


Figure 1-2a 年少児・観察画 (4歳2か月女児)

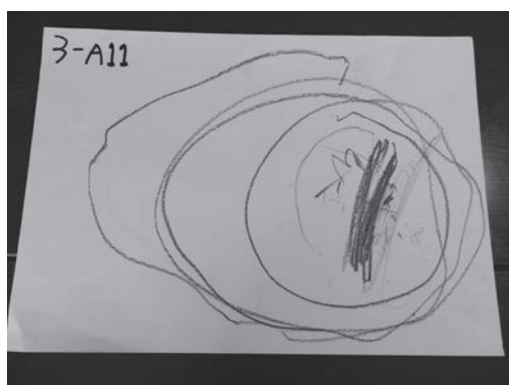


Figure 1-1b 年少児・想像画 (4歳4か月女児)

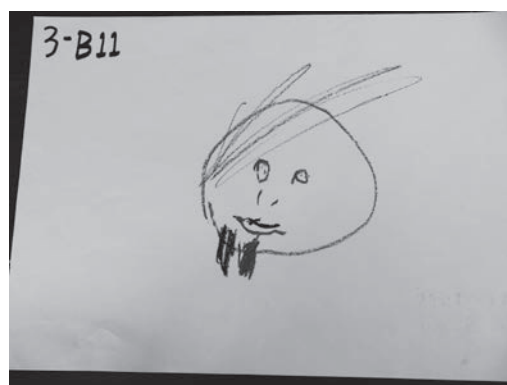


Figure 1-2b 年少児・観察画 (4歳4か月女児)



Figure 2-1a 年中児・想像画 (4歳8か月男児)

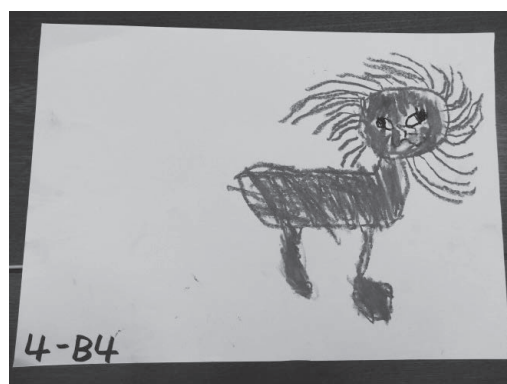


Figure 2-2a 年中児・観察画 (4歳8か月男児)



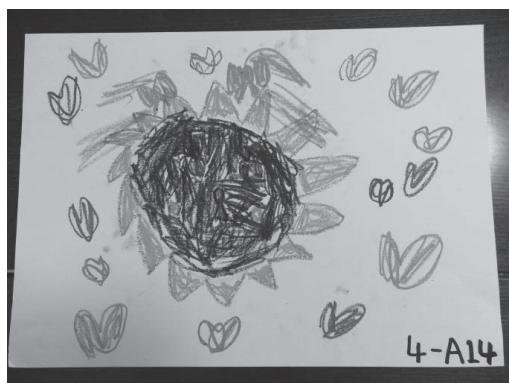


Figure 2-1b 年中児・想像画 (5歳2か月女児)

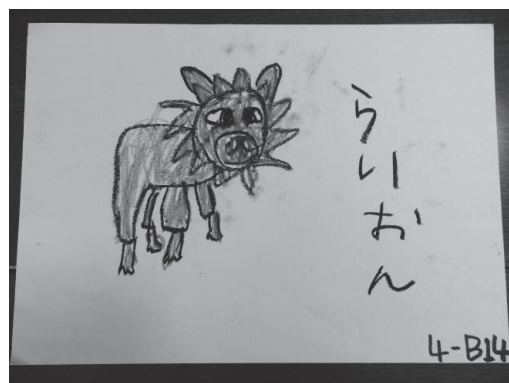


Figure 2-2b 年中児・観察画 (5歳2か月女児)



Figure 3-1a 年長児・想像画 (5歳6か月女児)

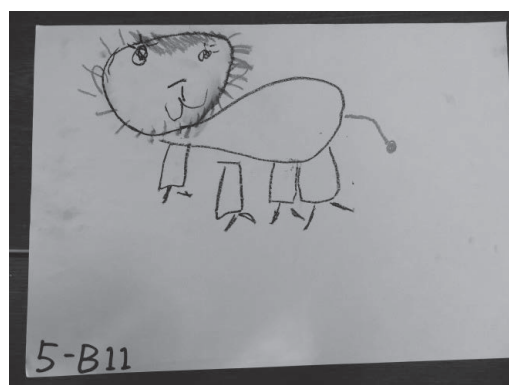


Figure 3-2a 年長児・観察画 (5歳6か月女児)

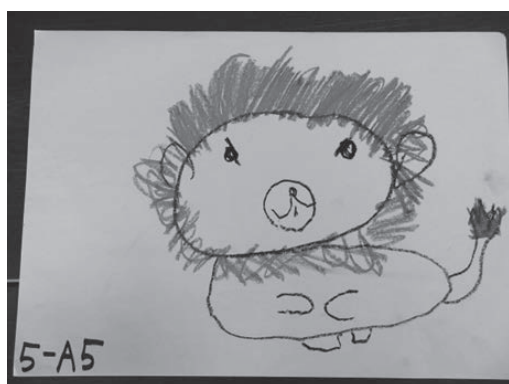


Figure 3-1b 年長児・想像画 (6歳1か月女児)

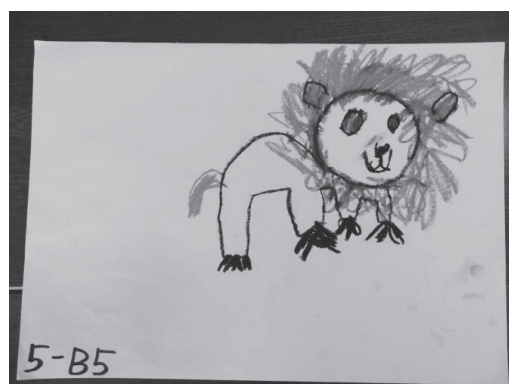


Figure 3-2b 年長児・観察画 (6歳1か月女児)